何事もなく静かに終わってほしい

「ジャパンカップ史上最低のメンツ」「これはメトロポリタンSか！」「これ、なんていうオープン特別？」などと、まったく盛り上がっていない国際
G1
がやってきた。女王ジェンティルドンナが勝ち、ゴールドシップ、エイシンフラッシュの
G1
馬
2
頭が続けば、秋の終わりの１日は静かに、「寂寥」（せきりょう）のなかに終わるだろう。

今年はぜひ、そう願いたい。で、買うのはジェンティルドンナの単勝のみ。

毎年、ジャパンカップの季節になると、24歳で夭折した詩人・立原道造を思い出す。立原道造の「のちのおもいに」によって、私は「寂寥」という言葉を初めて知った。高校生のころだ。

寂寥とは、辞書では「気配がなく、寂しい感じがするさま。また、心が満たされず、寂しいさま」となっている。英語だと「loneliness」。秋から冬へ移る季節のなかで、ふと感じる寂しさは、まさにこれだ。

競馬に負けて、ひとりでとぼとぼ帰る道。実際は人ごみのなかを歩いているというのに、まるでひとりぼっちのような寂寥感が襲ってくる。人生を虚しく感じる一瞬だ。

競馬新聞ばかり読んでいないで、たまには、詩集を読んでみましょう。予想が確実に違ってきますよ。

　のちのおもひに　（詩集『萱草に寄す』より）

夢はいつもかへって行った　山の麓のさびしい村に

水引草に風が立ち

草ひばりのうたひやまない

しづまりかへった午さがりの林道を

うららかに青い空には陽がてり　火山は眠ってゐた

ーそして私は

見て来たものを　島々を　波を　日光月光を

だれもきいてゐないと知りながら　語りつづけた…

夢はそのさきには　もうゆかない

なにもかも　忘れ果てようとおもひ

忘れつくしたことさへ　忘れてしまったときには

夢は　真冬の追憶のうちに凍るであらう

そして　それは戸をあけて　寂寥のなかに

星くづにてらされた道を過ぎ去るであらう